

# 素材3 黒潮の恵みがもたらす多様性

屋久島と種子島

黒潮は世界の海流の中で北大西洋の湾流とともに最も流量が大きい強大な海流です。この二つの海流が運ぶ熱と物質は地球規模の気候変動や地球環境に大きな影響を及ぼしています。黒潮は、熱帯からの暖かい熱、海中に浮遊している様々な物質や生物を運び込み、独自の多様性を創造しました。自然科学的な面だけにとどまらず、産業・文化・他国との往来など、文化的な面でも人びとの生活と深くかかわり合いをもっています。

## 植物

### マングローブ林(メヒルギ)

淡水と海水が混ざり合う河川域に自生するマングローブ。世界的に熱帯・亜熱帯地域に広く分布していますが、その自生北限は種子島・屋久島といわれています。特に、種子島のマングローブ(樹種メヒルギ)は、南から北上する黒潮によって流れ着いたと考えられ、島の東側では北部から南部まで広範囲に自生しています。樹高は、地形や環境により1m~10mと違いがみられ、一部の河川域では国の天然記念物に指定されています。また、マングローブ林には、イカリモンハンミョウやハマナツメ、ハマジンチョウなど、絶滅危惧種の希少な動植物も多く生息しています。シーカヤックに乗って、マングローブ林の中を散策することもできます。



種子島・屋久島は温帯の南端部に属し、亜熱帯と接する限界地にあります。植物の北限、南限として有名な渡瀾ラインが地域近くの南方海上にあって動植物資源の宝庫として、学術研究上注目されています。

### ガジュツ

熱帯アジア原産ショウガ科の薬草ガジュツは、典型的な熱帯植物で、日本では、沖縄から種子島・屋久島まで栽培されています。種子島・屋久島では昔からこの根を粉にして、家庭薬として使用していました。種子島・屋久島産のガジュツは外国産と比べ成分が異なるため多彩な薬用作用が証明されています。屋久島には製薬工場もあります。



ガジュツ根茎(2月)

ガジュツ開花(4-5月)

### クスリの島、屋久島

江戸時代の屋久島の古文書には、ガジュツ、ウコン、オウレンなどの薬草が栽培されていたことが記されています。島津藩の第25代藩主、島津重豪(しげひで)は、藩内の各郷に薬草園をつくらせて、薬用の木や草を植えさせました。屋久島にも2ヶ所つくられ、龍眼・レイシ、肉桂などが植えられ、特に円豆実(はすみ)が多くとれました。円豆実からとれる油は消毒薬として広く使われました。

**関連施設** 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 薬用植物資源研究センター 種子島研究部 連絡先 P21. ③番



熱帯・亜熱帯性薬用植物の試験栽培研究を目的に設置されました。重要性の高い薬用植物の収集保存、増殖、増取などに関する研究を行い、その成果をもとに栽培指導などを行っている研究機関(主な研究植物:ウコン属、インドジャボク、マオウ、ニッケイ)です。

・ご希望によりこのセンターでは、施設案内や講義も対応できます。

**関連施設** 屋久島 株式会社老舗恵命堂屋久島製薬工場 連絡先 P23. ⑥番



1993年からガジュツを原料とした胃腸薬「恵命我神散」を製造している工場です。構内にあるガジュツ鑑賞園の見学や実際にガジュツに触れたり学ぶことが出来ます。(要電話予約)胃腸薬の販売やサプリメント、鮎ちゃんの販売もあります。

・ご希望により案内や講話も対応させていただきます。  
・土日祭日の対応不可

### 安納いも

さつまいもはさとうきびと並ぶ種子島の基幹作物です。中でも安納いもはその甘さから全国的に有名で、特に島内産のものは糖度が高く、オクラや山芋にも含まれる多糖類が多くしっとりとした食感が人気です。これは、ミネラルを多く含んだ黒潮が種子島特有の強い海風で平坦な土壌に降りそそいでいるからだと言われています。令和4年に「種子島安納いも」は地理的表示(GI)登録されました。



**問合せ** 安納いもブランド推進本部 連絡先 P21. ⑤番

安心・安全な安納いもを生産するため、栽培技術の向上はもちろん、糖度審査などを通して品質基準を島内で統一し管理・出荷する取り組みを行っています。

### さとうきび

さとうきびは太平洋のニューギニア周辺が原産地とされ、島の栽培は1825年から始まったといわれています。黒糖製造の時期は不明ですが、島には古くから行われていた海水を濃縮して塩をとる製塩の伝統的な技術があり、これを応用してさとうきびの絞り汁を煮詰めた黒糖づくりが始まったと考えられています。さとうきびは、島の主要な産業の一つであり、産業としてのさとうきび栽培は種子島が北限になっています。奄美・沖縄と比べ気温が低いことから、栽培上の条件は厳しいところもあるものの、島内には品種や種苗の研究機関が設置され、研修の受入も行っていきます。近年はさとうきびの副産物を使ったバイオエタノールなどのクリーンエネルギーの研究もなされています。



**研究施設** 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構九州沖縄農業研究センター種子島研究拠点 連絡先 P21. ①番



さとうきびの高い生産能力を最大限に活用し、製糖は様々な用途利用のため、新品種の育成を行う研究機関です。

・ご希望により、さとうきびの新品種育成についての講義の受講や画場見学もできます。

**研究施設** 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構種苗管理センター鹿児島農場 連絡先 P21. ④番



鹿児島農場は、さとうきび原種農場として設置され、南西諸島の畑作基幹作物であるさとうきびの生産向上のための原種の生産・配布、さとうきび病害虫の検定のほか、種苗関係技術の調査研究、さとうきび・さつまいも・びわ等の植物遺伝の資源の保存・増殖を行っています。

**製糖工場** 新光糖業株式会社 12月~4月 連絡先 P21. ⑧番



島内のさとうきびを製糖するための工場として昭和31年に創立されました。工場では、さとうきびの搾りかすをボイラー燃料として使用・発電し、電力を賄っています。

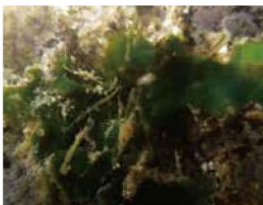
**製糖体験** 沖ヶ浜田黒糖生産協同組合 11月~4月



島の北東部にある沖ヶ浜田地区では、昔ながらのさとうきびの絞り汁を煮詰める伝統的な方法で製糖を行っており、こうした製法が「薩南諸島の黒糖製造技術」として、令和6年国の登録無形民俗文化財に登録されました。

TEL 080-2692-9670

## ヤクシマカワゴロモ (国指定天然記念物) 種子島 屋久島



ヤクシマカワゴロモはカワゴケソウ科の溪流に生える種子植物で、根が平たい葉状体となって岩の表面にはりついています。日本では屋久島の一湊川・白川のみに見られる固有種で、他のカワゴケソウ科植物と異なり花崗岩の転石上に生育しています。生育地周辺は、殆ど森林で良好な河川環境が維持されています。

**関連施設** 屋久島環境文化研修センター 連絡先 P23, ①番



屋久島の亜熱帯植物やコケの観察など幅広く学習することができます。

## ヤクタネゴヨウ (環境省絶滅危惧種) 種子島 屋久島

種子島・屋久島の固有種であるヤクタネゴヨウは、その名のとおり種子島・屋久島のみで自生している五葉松で、種子島に約200個体、屋久島に約1,500~2,000個体しか残っていないといわれている希少植物です。かつては、木材としてトビウコ漁など漁業用の丸木船に利用されたことにより、また、近年は病害虫や風倒被害を受け、次第に減少しました。いまでは、自生地の多くが、保護林などに指定され、官民一体となった保全活動が進められています。

**観察場所** 種子島 中種子町増田郡原など、島中央部山林  
屋久島 屋久島町西部林道沿い、破沙島周辺、高平岳

**関連施設** 屋久島森林生態系保全センター 連絡先 P23, ⑥番



世界自然遺産を含む森林環境の適切な保全と利用、普及教育・森林空間利用に関する取り組みを行っています。

## 海藻類 種子島 屋久島

種子島・屋久島周辺には約200種類以上の海藻類が繁茂しています。特に馬毛島周辺は、黒潮の影響を受け透明度が高く、波打ち際から水深30m前後の水深帯に幅広い繁茂がみられます。また、種子島の北東海岸には過酷な環境でも育ち、1年を通して観ることができるタネガシマアマノリが局地的に繁茂しています。種子島の伊関地区と島外数ヶ所だけに繁茂しているといわれ、冬にしかみられないアマノリ類の中では珍しい熱帯・亜熱帯性の新種で、1974年に発見されました。高温に強い耐性がある種として注目されています。

## タクマムラサキ (環境省絶滅危惧種) 種子島



花(花期:7~9月)

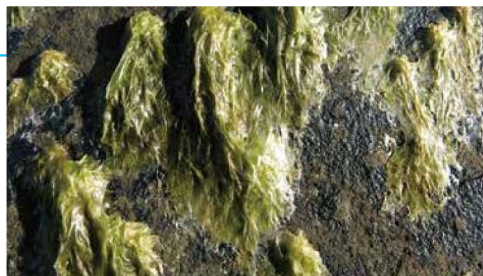


完熟果実(果期9月~2月)

クマツツラ科のタクマムラサキは、わが国では種子島、高隈山周辺、宮崎県にのみ自生が確認されています。紫色の花を咲かせ清涼感のあるフルーツ香が特徴で、中国では昔から民間薬として使用されています。生育状況や生育環境の研究のため、薬用植物資源研究センター種子島研究部では、資源の保全を行っています。南種子町では、タクマムラサキを守り育てるため、町内の宇宙が丘公園内に植樹し、官民一体となって緑あふれ花のかおりたじようコミュニティパークづくりを行っています。

**関連施設** 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 薬用植物資源研究センター 種子島研究部 連絡先 P21, ③番

種子島・屋久島の特色ある植物の研究などを行っています。



タネガシマアマノリ

# 生物

種子島・屋久島は黒潮と薩摩・大隅半島から南下する冷水が混合している海域でもあり、多種多様な、水辺の生物を見ることができます。また、その地域にしかない固有種の宝庫でもあります。

## ウミガメ 種子島 屋久島

ウミガメは、乱獲・漁網による被害や生息環境の破壊、海洋汚染などの影響を受け、今では絶滅の危機にさらされています。鹿児島県は、国内有数のウミガメ上陸数を誇り、中でも種子島・屋久島は、ウミガメ（アカウミガメ、アオウミガメ）の上陸する砂浜が数多くあります。県が取りまとめたここ数年のウミガメ上陸確認状況では、両島合わせて約4,000~5,000頭（延べ数）と県内有数の上陸頭数を示しています。特に屋久島の永田浜には、太平洋で最も高密度にアカウミガメの産卵がみられ、その生存に重要な場所であることが評価され、2005年11月8日にラムサール条約湿地に登録されています。ウミガメは、海を回遊して一生を暮らし、産卵の時だけ砂浜に上陸します。しかし、せっかく産卵しても孵化した5,000頭のうち成体になって浜に帰ってくるのはわずかに1頭だけと言われています。このため、種子島・屋久島では、地元集落やNPO法人などが保護の取り組みに力を入れ、環境保護活動や上陸したウミガメの調査研究をはじめ、環境教育なども行っています。

**関連施設** 屋久島 NPO 法人屋久島うみがめ館 連絡先 P23, ⑦番



ウミガメの保護と美しい砂浜を守るため、屋久島におけるウミガメの生態調査・研究・保護や環境保全・啓発活動を行っています。ウミガメが上陸する環境保全の啓発の調査研究結果や関連資料などを展示する「うみがめ館」を運営しています。



### 島の歴史と生態系

種子島・屋久島は数万年前には、九州本土と陸続きであったこともあり、動物相は似ていますが、屋久島産哺乳類のなかに、本土ではごく普通に見られるサル・シカ以外のキツネ・ノウサギ・アナグマなどが生息しないことは、この地域の不思議の一つとされています。

## エラブオオコウモリ (国指定天然記念物) 屋久島

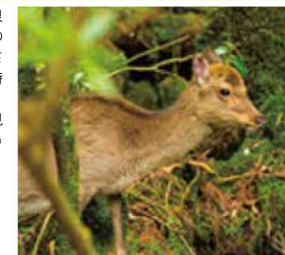
口永良部島は、世界のオオコウモリ類の生息北限地です。中でもエラブオオコウモリは絶滅危惧種に指定され、頭胴長約25cmで翼を広げるとクラスとほぼ同じ大きさです。体色は暗褐色で、首に雄は黄色の、雌は白の帯があります。夜行性で、昼間は林の中の樹にぶら下がって休み、夜になると餌場に飛来して、ガジユマルやアコウの果実、葉を食べます。



撮影：船越 公蔵 (鹿児島国際大学名誉教授)

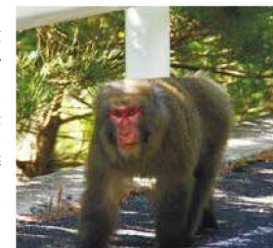
## ヤクシカ 屋久島

ヤクシカは、屋久島と口永良部島に生息し、ニホンジカの亜種の中でも一番高さが小さく、体の割に足が短いという特徴を持っています。海岸近くから山頂までの森や草地で見かけます。道路からでもゆつくり観察することができます。



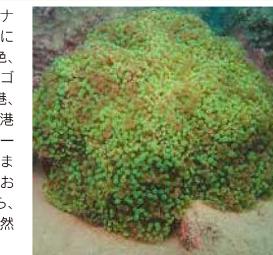
## ヤクシマザル (ヤクザル) 屋久島

ニホンザルの仲間(亜種)で、体が小さく毛が長いのが特徴です。島内のどこでも見られますが、餌になる木の実が多い照葉樹林が暮らすの場所です。中でも世界自然遺産登録地である西部地域は、群れて暮らすニホンザル本来の生態を見ることができる学術的にも貴重なスポットとなっています。



## タネガシマハナサンゴ 種子島

タネガシマハナサンゴは、ハナサンゴ科ナガレハナサンゴ属に分類される蛍光緑色や乳白色、褐色などの色彩が美しいサンゴです。西之表市の上ノ古田港、中種子町の犬城海岸、大塚屋港の南側海域など種子島のごく一部のみ生息が確認されています。絶滅危惧種に選定されており、貴重な生物であることから、平成31年4月に鹿児島島の天然記念物に指定されました。



# 種子島・屋久島に特徴付けられる主な植物

## 種子島・屋久島 共通固有種

**ヤクシマサルスベリ(ミンハギ科)**  
亜熱帯の琉球、台湾まで分布するシマサルスベリの変種。庭園で広く栽培されているサルスベリと同じ仲間、日本ではこの一種のみが自生しています。

**ヤクタネゴヨウ(マツ科)**  
葉は長さが5~10cmで5本が1組になっています。常緑の高木で高さは大きいものは20mを超えます。毬果(キユウカ、松ぼっくり)は先が丸く長さ5~10cmで、種子には翼がありません。

**カンツワブキ(キク科)**  
ツワブキの近縁種で、山地の溪流沿いの湿った岩場に生育します。花は、黄色で11~12月頃に咲きます。葉は表面に光沢がなく先が尖り、不規則な鋸歯(キヨシ)があります。

**ヤクシマツワブキ(キク科)**  
カンツワブキとツワブキが混在する場所で見られます。葉は表面に少し光沢があり質がやや厚く、葉の形はやや角張った印象があり、小さな鋸歯が多く、両種の中間的な形質を持っています。

**ヤクシマミヤマスマレ(スミレ科)**  
山地林内の湿った岩の上などに生育します。葉の長さは1cmほどで小さく、ヒメミヤマスマレをさらに小型化した印象です。花は白色で紫色の筋が入り、3~5月頃に咲きます。

**タネガシマシコウラン(ラン科)**  
山地の樹幹や岩場に着生します。基本種であるシコウランに比べて側萼片が短く、花の色は濃い傾向があり紫紅色です。花は6~10月頃に咲きます。葉は広楕円形で細長くやや厚く硬いものが普通とされますが、様々なタイプがあります。奄美や沖縄などに分布するシコウランと区別せず、広義のシコウランに含める考え方もあります。

## 種子島固有種

**タネガシマヤマトツジ(ツツジ科) 未記載種**  
島内の中・南部の海岸近くに分布しています。花はオレンジ色で初夏に咲き、ヤマトツジに比べると花期が遅い傾向があります。(未記載種とは、まだ学術論文に正式な名前が発表されておらず、分類学的な学名記載などが行われていない種のこです。)

**タネガシマアザミ(キク科)**  
林縁部や水田の土手方面などに生育しています。花は紫がかった濃いピンク色で10~12月頃に咲き、頭花が直立し、総苞(花の基部にある細長い葉の集まり)は粘りません。枝別れが多く分枝しやすく、葉の刺はさわるほど痛い鋭い鋭くがっています。

**ムラクモアオイ(ウマノスズクサ科)**  
林床に生育しています。花は10~11月頃に咲き、萼頭に毛がありません。屋久島に分布するクワイバカナオイと同一種とする考えもあります。

## 屋久島固有種

**オオカゴカヨウオオレン(キンポウゲ科)**  
標高600m以上の湿気が多い岩や樹皮についています。葉は羽状に裂けており、一年中見ることができ、白く可憐な花が咲きます。

**シャクナンガンビ(ジンチョウゲ科)**  
標高1,700m付近から見られる落葉低木。花期は6~8月で赤紫色の花をまとめてつけます。

**アクシバモドキ(ツツジ科)**  
樹上に着生する落葉低木。花は、紅色を帯びた白色をしており、果実は6mm程の球形で9~10月頃に黒紫色に熟します。

**ハナヤマツリンドウ(リンドウ科)**  
標高500m以上に見られる多年草。花は青紫色で、直径7mmほどの赤紫色の果実がつけます。

**ヒメウメバチソウ(ユキノシタ科)**  
湿原などによく見られるウメバチソウの近縁種。分布域が非常に限られている希少な植物です。

**ヤクシマシオガマ(ハマツウボ科)**  
標高1,800m付近の草地に生える多年草。花のない時期はシダと間違ひやすいです。8~10月頃に紅紫色の花が咲きます。

**ヤクシマジャクナゲ(ツツジ科)**  
樹形豪壮、葉は有柄で小判型をしています。花は、淡緑色が稀に白色に近い色になります。

**ヤクシマショウマ(ユキノシタ科)**  
アカショウマの変種。標高300m以上の沢近くに生える多年草。白い小花を密につけます。

**ヤクシマナミキ(シソ科)**  
標高1,000m以上に生育しています。高さ5cmの茎に長さ15mm程の青紫色を数個つけます。

**ヤクシマフウロ(フウロソウ科)**  
標高1,800m前後の岩場に他の植物と混生して生育しています。夏に、うすい赤紫色のすじのはいった整った美しい花が咲きます。

**ヤクシママコナ(ゴマノハグサ科)**  
草丈20cm程度で、8~9月に紅紫色の花が咲きます。

**ヤクシマノギク(キク科)**  
大型の野生菊。標高300~400mのいつも濡れている花崗岩の上などにも見られます。

**ヤクシマヤマトツジ(ツツジ科)**  
落葉低木。5月に紅紫色の花が咲きます。

## 種子島の北限種

**ナンテンカズラ(マメ科)**  
棘のある常緑の木性つる植物で、種子・屋久以南の海岸近くの路傍や林縁に生えます。

**シマオオタニワタリ(チャセンシダ科)**  
湿った林内の岩上や樹上に着生する大型のシダ植物で、オオタニワタリによく似ているが葉裏の胞子嚢群が短い点が異なります。

**アツバキノポリシダ(イワデンダ科)**  
キノポリシダの変種で、葉質が厚く、羽片の裏面の脈ははっきりしないタイプです。

**シロミミズ(アカネ科)**  
種子島以南の各地に自生する常緑の低木で、やや湿った林内に多くみられます。

**トキワヤブハギ(マメ科)**  
種子島以南の南西諸島から熱帯アジアに広く分布するヌメビトハギ属の一種で、関東以西に分布するオオバヌメビトハギの亜種です。

**イボタクサギ(シソ科)**  
種子島以南の南西諸島から台湾、中国南部に分布するクサギ属のツル性低木です。長く突き出た赤い雄しべが特徴です。

**イナバラ(ラン科)**  
鹿児島県では種子島と屋久島だけに記録がある常緑の地生ランで、主な産地は沖縄です。希少な植物で、環境省のレッドデータリストの絶滅危惧1B類に選定されています。

**タカツラン(ラン科)**  
西之表市の万波や古田の森を北限とするつる性地生ランです。環境省のレッドデータリストの絶滅危惧1A類に選定されています。

## 種子島の南限種

**アキノタムラソウ(シソ科)**  
本州以南に広く分布する多年草で屋久島が南限とされていますが標本がなく、近年確認されたものとしては種子島が南限と考えられています。

**コナラ(ブナ科)**  
県本土以北では二次林を構成する普通種ですが、南西諸島では種子島の中北部が南限となっています。

**ワレモコウ(バラ科)**  
本州から九州の明るく草原などに丸く分布するワレモコウ属の多年草で、暗紫色の花穂がよく知られた植物です。

**ニッポンイヌノヒゲ(ホシクサ科)**  
北海道から種子島の湿地に生えるホシクサのなかまです。鹿児島県では個体数は少ないです。

**ハマカンゾウ(ユリ科)**  
関東以西の海岸に生えるワスレグサ属の一種で、屋久島と種子島が南限とされています。

## 屋久島の北限種

**モダマ(マメ科)**  
山地に生育する大型の常緑のつる性木本です。大きいものでは、つるの太さが数10cmに達します。葉は2回偶数羽状の複葉になります。花は小さな黄緑色で穂状につき、果実は大きく長さ1m、幅15cmに達することもあります。

**リュウキュウコケリンドウ(リンドウ科)**  
背丈3~5cmの2年草。海岸の隆起サンゴ上に生育しています。3月~4月に淡青色の花が咲きます。

**マルバルリミノキ(アカネ科)**  
高さ1~3mの常緑低木です。葉は丸く広楕円形で先が尖り対生につき硬い質感です。葉の裏面や枝に黄褐色の毛が密生します。葉柄はほとんどありません。花は白色で実が暗褐色に熟します。

**チャボイナポリ(アカネ科)**  
山地の湿った常緑樹林の林床に生育する多年生草本です。高さ5~15cmでイナモリソウ属の中では小型です。花は長さ3~5mmと小さく釣鐘状です。

**シマフジバカマ(キク科)**  
海岸近くの岩上などに育成する多年生草本です。葉は対生につき、広卵形粗い鋸歯があり、質はやや厚く感じます。花はややピンク色がかった白色です。

## 屋久島の南限種

**フタリシズカ(センリョウ科)**  
多年草で花期は4~8月で、ヤクスギランドで多く見ることが出来ます。

**キバナノコマノツメ(スミレ科)**  
北極を中心とする環状に分布し、北半球冷温帯の広範囲に広がって生育しています。高さ5~20cm程で6~8月に黄色い花が咲きます。

**ツルアジサイ(アジサイ科)**  
幹や枝から気根を出して高木や岩崖に付着し、高さ15~20mくらいにまで絡みながら這い登ります。6~7月に白い花が咲きます。

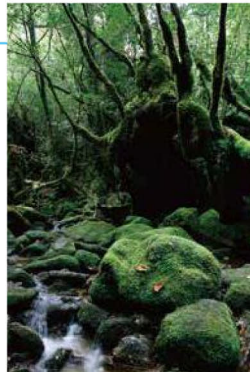
**ヤマボウシ(ミズキ科)**  
高さ5~10mの落葉高木。名前は白い総苞片を頭巾に見立てたもので、果実は赤く熟し食べることが出来ます。

# 地形・地質

約130万年前、種子島・屋久島と本土及び奄美大島が陸続きであったことを示す化石や、周囲132kmの中に九州最高峰の山々がそびえる屋久島の地質の研究も興味深いものです。

## 多彩な地質 屋久島

屋久島は、1,300万年ほど前、地中深くでマグマが冷え固まってできた花崗岩が、周囲の堆積岩より軽いため、溜っていた堆積岩を押し上げてできた隆起の島です。この花崗岩は、特に屋久島花崗岩と言われ、現在も上昇が続いていると考えられています。長さ数cmもある乳白色の大きな正長石の結晶を含んでいるところに特徴があり、ほかの花崗岩とは容易に判別することができます。九州一高い宮之浦岳をはじめとする名だたる山々や特異な種生、白谷雲水峡や千尋（せんびろ）の滝といった屋久島のすばらしい景観・奇観は、この地質によってもたらされているといっても過言ではなく、2007年には日本地質百選にも選定されました。また、島の西には活火山である口永良部島が、東には付加体（押しつけられた地層の集まり）のみでできた、平たい種子島があり、それぞれ地質学的に異なる要素からできていることから、日本列島の基盤をなす様々な地質を観察することが可能です。



白谷雲水峡



千尋の滝



屋久島の地層

(資料提供：YNAC)



宮之浦岳

## 化石が示す歴史 種子島 屋久島

種子島では島内各地で化石が採取されており、西之表市の形之山（カタノヤマ）化石群からは産出した魚の一種がタネガンシマシンの名で報告されたり、エビ、カニ、二枚貝、巻貝などのほか、現在では奄美大島だけにしか生息していないアマミイシカワガエルや、なんとゾウの化石まで発見されています。一方、屋久島では2003年、直径1mもある巨大な押し花のような模様をはじめ、大きくうねった線や小さな点々の連続など、不思議な模様がたくさん浮かび出た地層が見つかりました。これらは太古の海底にいた生物たちの巣穴や動き回った跡で生痕（せいこん）化石といえます。中でも水深3,000mもの深海にすむユムシが糞をした跡と言われる化石ズーフイコスは、とても貴重で珍しいものです。



形之山化石群



化石ズーフイコス(屋久島町宮之浦)

## 関連施設 種子島 種子島開発総合センター（鉄砲館） 連絡先 P21、⑥番

種子島象の肋骨、とう骨の展示など種子島で発掘された化石や地理地質について学習する事ができます。



## 関連施設 屋久島 屋久島環境文化研修センター 連絡先 P23、①番

屋久島の地質を観察し、水の循環を学ぶ研修を行っています。

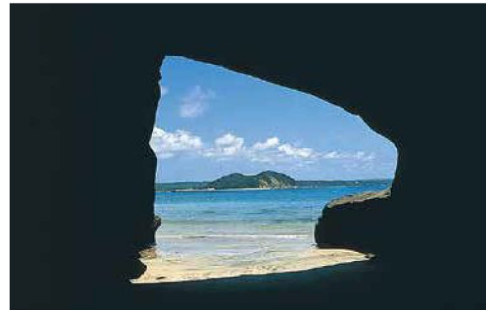


## 風化や浸食を受けてできた奇岩や洞窟、奇礁 種子島

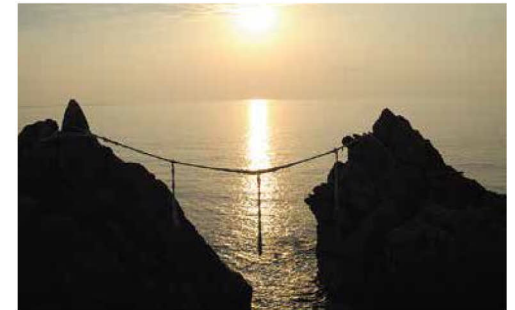
種子島には、波の浸食によって作られた洞窟や奇岩が数多く存在し、干潮時のみ入ることができる「千座（ちくらの）岩屋」は、観光スポットとしても有名です。

### 種子島の奇岩

- 千座の岩屋(南種子町)
- 雄龍雌龍(おたつめたつ)の岩(中種子町)



千座の岩屋



雄龍雌龍の岩

## 海岸に沸く露天温泉 屋久島

屋久島には火山はありませんが、島内にはたくさんの温泉があり、中には干潮のときだけ入ることが出来る海岸に沸く温泉もあります。

### 屋久島の露天温泉

- 平内海中温泉(屋久島町平内)
- 湯泊温泉(屋久島町湯泊)



平内海中温泉

# 歴史・民俗と生活

黒潮の流れは、種子島・屋久島を多様な生物の宝庫にただでなく、人の往来や地域の文化、歴史や産業などあらゆるものに影響を及ぼしてきました。

## 広田遺跡をはじめとする遺跡群

種子島では島内の各所から旧石器時代・縄文時代草創期・縄文時代早期の遺跡が次々と発掘調査され、日本の縄文文化観や旧石器時代観の転換に迫る大発見が相次ぎ、全国的にも注目されています。南種子町の広田遺跡からは国内最古といわれる文字が刻された貝符が発見されるなどその出土品は国の重要文化財に指定されています。種子島には、この広田遺跡をはじめ多くの遺跡があり、遺跡巡りも楽しめます。

〈広田遺跡ミュージアム〉



オオツツノハ腕輪 (国重要文化財)

〈広田遺跡公園〉



北区1号墓・北区2号墓  
遺跡公園に復元してある約1700年前の墓。貝製装身具を身につけた成人男性が埋葬されました。

### 主な遺跡 広田遺跡 (国史跡)

連絡先 P21、9番



広田遺跡は、弥生時代終末期～古代の集団墓地で、貝製装身具などの出土品は国の重要文化財に指定されています。

### 関連施設 広田遺跡ミュージアム

連絡先 P21、9番



広田遺跡に関するガイダンス施設として2015年3月にオープンし、貴重な出土品等を展示しています。

### 主な遺跡 横峯遺跡 (国史跡)

連絡先 P21、13番



種子島で初めて発見された旧石器時代の遺跡であり、旧石器時代、縄文時代にヒトが住んでいた跡が見つかっています。約3万年前の地層からは、日本国内最古の調理場跡も発見されています。

### 関連施設 種子島開発総合センター (鉄砲館)

連絡先 P21、6番



西之表市内の遺跡から発掘された出土品を展示しています。種子島の古代人の生活が浮き彫りにされています。

## 黒潮洗う種子島の地に根付いた赤米

はるか昔、日本に伝わった米には白米と赤米とがいましたが、赤米は次第に淘汰されていったと考えられています。そのような中、岡山県総社市の国司神社、長崎県対馬市の多久頭魂神社、そして種子島の宝満神社の3神社では、神事に用いて古代赤米が伝承されています。南種子町にある宝満神社に伝承する赤米にはいくつかの特徴がありますが、国内で確認されている伝統的な栽培種がジャバニカ種であるのに対し、東南アジア～インドネシアの古い品種と共通するジャバニカ種であることが注目されており、これも黒潮がもたらした恵みといえます。南種子町では、毎年4月上旬にその年の豊作を祈願して、種子島宝満神社の御田植祭 (国指定文化財) が古式ゆかしく行なわれています。



種子島宝満神社の御田植祭

### 関連施設 たねがしま赤米館

連絡先 P21、7番



赤米

玉依姫を祭った宝満神社に伝承する赤米を中心に、赤米をめぐる文化について展示・紹介しています。

## 屋久杉と如竹

樹齢1000年以下の小杉は、1563年に鹿児島神宮の改築用材として切り出されていますが、巨木の屋久杉は神木とみなし伐採していませんでした。その後、屋久杉は材質の素晴らしいから、天下統一を果たした豊臣秀吉が京都の東山に大仏殿を建立するための建材として目を付け、献上するように命じたという記録が残っています。屋久島は農地が狭く、当時の島民の主食は芋や粟、雑穀などでした。貧しい島民を豊かにするため、屋久杉の経済資源の利用に目を向けたのは、安房出身の儒教者で法華宗学僧の泊如竹 (とまりよちく) といわれています。如竹は、「屋久杉を切る前に斧を一晩杉の木に立てかけ、斧が倒れていれば神の許しを得られなかったとして切ってはいけない。倒れていなければ神の許しを得られたものである。」と説いて、木材資源の利用を進めました。屋久杉の利用は1630年頃から始まっています。



屋久杉

## 鉄砲伝来と鉄砲づくり

1543年種子島の門倉岬に漂着した船に乗船していたポルトガル人が持っていた鉄砲 (火縄銃) に着目した時の島主種子島時義は、大金を投じてこれを譲り受け、使用方法を教わりました。これが日本への鉄砲伝来です。鉄砲の威力を知った時義は、種子島在住の鍛冶屋・八板金兵衛清定に命じ複製をつくらせました。時はまさに戦国時代であり、織田信長が1575年の長篠の戦いで数百挺の鉄砲隊を編成し、圧倒的な勝利を得ると、他の武将たちも競って、鉄砲を調達するようになり、国内の鉄砲鍛冶が盛んになりました。一挺の鉄砲が種子島に伝来してから約30年、驚くべき速度で普及したのは、日本の板金技術がきわめて秀れていたことを示すもので、外国にこのような例はみられません。なお、種子島で鉄砲の国産化が成功した理由として、高い製鉄技術があったことと材料の鉄が豊富に調達できたことがあげられます。南種子町の広田遺跡 (弥生時代の遺跡) からは鉄製品2本が出土しており、弥生時代にはすでに製鉄技術があったことが推定されています。また、種子島をとりまく海浜には今なお莫大な砂鉄が埋蔵されており、国産第1号の火縄銃を製造した八板金兵衛は鉄を求めて種子島に移住してきたと言われており、鉄の島としての種子島が、当時から国内に広く知られていたということも物語っています。種子島銃は衰微しましたが、その鍛冶工技術は連綿として継承され、時代の変遷を経て、種子島の伝統工芸品「種子鉄」「種子島包丁」に受け継がれています。



火縄銃試射

### 若狭姫伝説

鉄砲伝来にまつわる女性と語り伝えられている若狭は、鍛冶工・八板金兵衛清定の娘です。八板金兵衛は島主の命によって、鉄砲の国産化に日夜苦心していましたが、鉄砲の銃身の底を鑿ぐネジ止め部分の構造が分からず (鉄砲が伝来した時代、日本にはネジというものが存在していませんでした。) ポルトガル人に尋ねました。ポルトガル人は娘の若狭が嫁になれば教えるという返事でした。若狭は父の仕事の完成との板ばさみになって苦しんだあげく、意を決してポルトガル人の妻となりました。これで清定は秘法を学ぶことができ、種子島銃の完成を見たのです。



### ネジ切り技術

火縄銃製造の鍵となったネジ切り技術ですが、この「ネジ」という名は鉄砲で分業した種子島の鍛冶達が「捻り (ねじり)」と名づけたことに始まっています。鉄砲の伝来は、今日の機械器具に欠かすことができないネジの作用を、初めて知ることにもつながったのです。

### 関連施設 種子島開発総合センター (鉄砲館)

連絡先 P21、6番



南蛮船をイメージした外観が目を引き施設です。国産第1号の銃をはじめ、世界の銃砲が見学できます。その他、種子島の文化や民俗等ここにくれば、種子島のすべてが分かります。

## インギー鶏

種子島には、しばしば漂流船が打ち上げられました。1894年4月には、29人の船員が乗ったイギリスの貿易船ドラメルタン号が、東南部の前之浜に漂着しました。住民は乗組員を手厚くもてなし、壊れた船底の修理なども手伝っています。船は、英国艦隊によって3ヶ月ほどかけて修理され、島を出ていく際、もてなしのお礼に船長から鶏10羽程が贈られました。現在も、南種子町ではこの子孫を飼育し、守り伝えています。「イギリスの鳥」ということでインギー鶏と呼ばれ、毛色は黒に2~3本の朱色がみられます。濃厚で柔らかな肉質をもつなど中国南部の地鶏の特徴を持っており、日本へ立ち寄る前に清で込み込んだと思われます。ただし、現在は種子島だけに原種が残る珍しい鶏です。

